



## 幼稚園から来た子ども

明 間 進 子

まだ幼稚園教育が普及していない時代には、幼稚園を卒業した子どもは特別視されたし、そうでない子どもと比較する材料も多くあった。しかし現在では、普通の家庭の子どもは、大体幼稚園教育を受けており、幼稚園にいかない子どもは、特別の事情（特に経済的なもの）のある家庭か、或いは、だれもかれも幼稚園幼稚園とさわぐから、自分の子どもだけは、親自身で教育してやろうという熱心な家庭の場合が多い。又、子どもの生活環境、性格、能力等すべて考慮に入れると、比較検討して顕著な相違を見出すことは、なかなか困難である。このようなことから比較的一般性のある問題を取り上げて考えてみたいと思う。

### (一) 健康生活の習慣

- (1) 手を洗う。(用便後、給食前、作業後)
- (2) うがいをする。(外出後、遊戯後、給食前)
- (3) 爪を切る。
- (4) 鼻をかむ。

- (5) 汗を拭く。
- (6) 姿勢を正しくする。
- (7) けがの手当をすぐ受ける。
- (8) 頭痛、腹痛その他を早く訴える。
- (9) 便所にいくのをがまんしない。
- (10) ハンカチ、鼻紙を忘れない。
- (11) 給食をゆっくり落着いて食べる。
- (12) 偏食をしない。

統計的なデータは持っていないが、児童観察記録によると、全般的には幼稚園組の方が、すべての点で優れているといえる。(1)は、給食前の手洗は、家庭組もすぐ習慣化するが、給具、のり、粘土等を使って作業した後も手洗をする習慣は、幼稚園組の方がよい。(2)(3)も家庭組は、割合に無頓着であり、気がつかない。(4)親が手を出しすぎる。(11)(12)のように担任の先生、養護の先生に申出る場合も、幼稚園組は気楽にいうことができるが、家庭組は、一大決

心をしてからいので、先生の方があわててしまうことがある。(ウ)は生活環境や特異体質等種々の事情ではつきりいえない。

幼稚園組は、健康生活の習慣が身についている場合が多い反面、馴れ過ぎのためか、本当に習慣化しなかったのか、強制され過ぎていたのか等で、小学校入学後の健康生活が全然振り出しに戻ってしまう場合が見られる。家庭組が、先生の注意を熱心に聞いて実行しようとしている時、じゃまをしたり、騒いでいる幼稚園組を時々見かける。このような問題は社会生活の適応とも関係深いものである。

## (二) 社会生活の適応

### (イ) 規則を守る。

登校時間を守る。遅刻しないようにする。

上靴、下靴を区別する。

持物をきまつた場所に置く。

廊下を静かに歩く。

ブランコや雲梯は順番に使う。

運動用具、遊び道具はきちんとしまう。

水道、便所の使い方を正しくする。

花だんに入らないようにする。

右側を歩く。

道の横断に注意する。

### (ロ) 自分ことは自分でする。

身のまわりの持物は自分で始末する。

自分の戸棚や引出しは、自分で整理する。

先生への用事は、自分できちんとという。

ころんでも泣かない。

不始末したらなるべく自分で始末する。

### (ハ) お友だちと仲良くする。

先生や友だちの名まえを早くおぼえる。

新しい友だちと仲良く遊ぶ。

困っている友だちを助けてあげる。

遊び道具や本をみんなでも仲良く使う。

### (ニ) 挨拶や返事ができる。

なまえを呼ばれたり、しごとをたのまれたら、「ハイ」と返事をする。

日常の簡単な挨拶ができる。

### (ホ) 物を大切に使う。

むだづかいをしない。(お金、紙、その他)

本、鉛筆、ノート等の始末をよくする。

持物に記名する。

持物を落したり、忘れたりしない。

学校の用具を大切に使う。

### (ヘ) 人の話を気をつけて聞く。

(ト) ことばづかいに気をつけて話す。

全般的には、幼稚園組の方が社会生活に馴れており、新しい社会

に入っても、家庭組に比べて、早く適應することができる。しかし個々の項目、個々の児童について調べると多くの問題を含んでいる。(4)について、家庭組の時間的觀念が非常に薄いのに比べて、神経質な程、時間を気にする子どもが、幼稚園組に多い。一つの作業を気のむくままに何時間でも続ける家庭組。「先生、今何時?」「あと何分でお給食」と時刻を気にし時間に興味をもつ幼稚園組。自分の机や靴箱を早く覚えるのも幼稚園組に多い。水道の栓の留め方がわからないで噴水のようにする子ども、ドアのノックや水洗式の使い方のわからない子ども、花だんに入ったボールを取るのに無難作に足を踏み入れる子どもは、大体家庭組である。(5)については、家庭組は、自分と他人をはっきり区別して、自分のものさえきちんとしていれば、教室内は汚れていても気がつかないが、幼稚園組は、みんなのごみも一緒に捨ててきてくれる自発性をもっている。(6)についてははっきりと差が見られる。幼稚園組は、新しい友達に気安く話しかけられるし、又話しかけられても気軽に応じられる。又、教室内の遊び道具や本を自由に取り出して自分の玩具のように使ひこなすことも幼稚園組の方が活発である。これに反して、遊び道具や本のお気に入りだけを独占するのは、家庭組に多い。(7)については、返事は、家庭でも注意してゐらしく、出欠をとるのになまえを呼ばれて返事のできない子どもはいなかったが、しごきをたのんだり、とっさの場合等は、家庭組はすぐに返事ができないことが多い。登校、下校の際の先生や友だちの挨拶も表情豊かに、気軽にできるの

は幼稚園組であり、口の中で小さな声でいったり、はずかしがってニヤニヤするのは、家庭組に多い。(8)については、特別の差は見られないが、学校や学級の中にあるものが自分も含めてみんなのものであるから、みんなで大切にしようということがなかなか納得いかないのは家庭組に多い。(9)については、幼稚園組は、非常によくその態度ができている場合と、そうでない場合と極端に表われている。前者の子どもは、話の内容をよく理解し、時間的にも持続して聞くことができるが後者の子どもは、話を最後まで聞かないで、途中で一人合点し、話のすじを知ったかぶりで話し出し、短時間しか注意が集中せずいたずらを始める。家庭組は、非常に熱心に話を聞くこうとする態度が見られる。しかし、時間的にはあまり持続しないが、友だちと話したり、席を立ったりすることがない。(10)については、一般に幼稚園組は、幼児語的言葉から脱けて標準語に近いものになっており、一応すじみちをたてて話すことができる。しかし、その中に「幼稚園語」とでもいうような特別の言葉づかい、(例えば、言葉の中に「ネエ、ネエ」「ンデネ」「ネ、ネ」等が非常に多く入ること、接頭語に「オ」を付け過ぎること)が多いことが非常に目立つ。家庭組は、発音がはっきりしないこと、一つの単語だけで(例えば、「先生、便所」「ない」「外」)話の内容を表わそうとすることが多い。

社会生活に対する適應は、幼稚園組の方が優れていることは、以上の点からも判るが、その反面、反社会性(反抗的行動)、超社会性

(進取的行動)を帯びた子どもが少くないことも見逃せない。これは、家庭組に無社会性(後退的行動)をもった子どもの多いのに対象的である。反抗的児童は、学校、学級の規則を無視して自分勝手に振舞い、注意すると益々反抗していく。進取的児童は、みんなですべきことを自分一人でしなければ、気が済まず、先生を独占し、友だちを押しつけて我を張る行動をする。このような反社会的、超社会的の行動は幼稚園において、社会生活に馴れすぎて行動が大胆になってくること、幼稚園の社会生活に十分適応できないで反動的にそのような行動がでてくること、成長の時期として反抗期に当ること等によって起るのではないかと考えられる。家庭組の後退的行動は、社会生活の適応への前提として、引込み思案で恥しがりやの子どもにも多く見られることである。

### (三) 知的生活

(1) 観察力 (2) 理解力 (3) 創作力 (4) 表現力 (5) その他  
(1)については、日常生活の中で社会的なものの理科的なものを、観察する力を特に指すが、幼稚園組は、その観察の範囲が広く、いろいろなものに興味を持っており、観察力も平均的で常識的である。それに比べて、家庭組は、範囲は狭いが一つのものに非常に深く観察の眼をむけている場合が多い。(2)については、能力の問題もあるが、話の内容を早く理解することができるのは、幼稚園組である。

ただ、理解力に粗雑さがあるのも見逃せない点である。(早のみこみ、早合点)については、幼稚園組は、創造的な絵を描く子ども

と技巧的な絵を描く子どもに分けられる。創造的な絵は、題材内容が豊富で構成も子どもらしくユーモラスである。技巧的な絵は、絵本をまねたような面白味のないもので、先生の批評を非常に気にする。前者は、幼稚園その他の場がよい影響を与えたものであるが、後者は、小学校における創造活動に非常な弊害を及ぼしている。いろいろな材料で工作する場合にも幼稚園でしてきたことに非常に拘束されやすい。家庭組は、題材、内容共貧弱であり、技巧的にもゼロに近い。創造活動にも最初は、手がつかないらしいが、すぐに楽しんで自由に気持を表現する。新しい工作材料を使いこなすことは遅いが、試行錯誤し楽しみながら創作する。(3)については、特に言語表現(前述)と絵画表現の場合がある。創造活動と密接に関係していることであるが、「いいあらわすこと」「描きあらわすこと」においては、幼稚園組の方がすぐれている。(4)については、文字、数等を観念的に理解しており、具体物から発展する学習に弊害をを及ぼす場合が、幼稚園組に多い。

結論。幼稚園教育の普及と進歩により、幼稚園から来る子どもは、家庭から直接入学した子どもより、健康生活に対する訓練、社会生活に対する適応、知的生活の成長等優れた点を多く持つっており、今後そのような方向に進むことを望むが、個々の子どもの能力、性格、欲求等を十分考慮すると共に、小学校生活との連絡も密接にして、子どもが、新鮮な希望をもって小学校生活への出発ができるようにしたいと思う。(筆者は東京都文京区立駒本小学校教諭)